

第3回 献血推進のあり方に関する検討会 議事次第

平成20年11月20日(木)
午前10時～12時
はあといん乃木坂 6F ソレイユ

1. 開会
2. これまでの議論を踏まえた論点の整理について
3. 「採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」の設置について
4. 他分野における広報戦略について(イベント成功事例)
5. 具体例な広報資材の紹介(「小児ガンとの戦いの記録」)
6. 社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策について
7. 閉 会

資料一覧

- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 資料 1 | 献血推進のあり方に関する検討会 委員名簿 |
| 資料 2 | 論点(案) |
| 資料 3 | 採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」の設置について(案) |
| 資料 4 | ライブ・イベントを核とした社会貢献活動事例集 |
| 資料 5 | 「いのちをつないだ献血」(赤十字新聞) |
| 資料 6-1 | 年齢別献血者実数グラフ(年間献血回数別【6都道府県抜粋】) |
| 資料 6-2 | 年齢別・施設別延べ献血者数グラフ【6都道府県抜粋】 |
| 資料 7 | 初回献血者の増加を目指して(研究レポート) |

「献血推進のあり方に関する検討会」

委員名簿

	氏名	現職
1	飯沼 雅朗	社団法人日本医師会 常任理事
2	宇都木 伸	東海大学法科大学院実務法学研究科 教授
3	衛 藤 隆	東京大学大学院教育学研究科 教授
4	大平 勝美	社会福祉法人はばたき福祉事業団 理事長
5	掛川 裕通	日本赤十字社血液事業本部 副本部長
6	川内 敦文	高知県健康福祉部 医療薬務課長
7	河原 和夫	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 教授
○ 8	清水 勝	医療法人西城病院 理事
9	住友眞佐美	東京都福祉保健局 保健政策部長
10	田辺 善仁	株式会社エフエム大阪 専務取締役
11	中島 一格	東京都赤十字血液センター 所長
12	羽田真由香	全国学生献血推進協議会 委員長
13	花井 十伍	ネットワーク〈医療と人権〉 理事
14	堀田美枝子	埼玉県立浦和西高等学校 養護教諭
15	山本シュウ	株式会社アミューズ所属 ラジオDJ

○…座長

論 点 (案)

1. 社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策

- ① 高校生献血のあり方
 - 献血体験以外の有効な啓発手段は考えられないか
- ② 地域における献血のあり方
 - ドナーの年齢層、地域の特性により、献血推進方策が異なるのではないか
 - 献血バスの効率的な運用方法
- ③ 学校教育における啓発
- ④ メディア等を活用した広報戦略のあり方
 - 若年層個人に有効にアピールする広報戦略
 - 年齢層・地域の特性に対応した具体的広報戦略
 - 献血血液の使用状況の情報提供のあり方
- ⑤ 200 mL 献血の今後のあり方

2. 採血基準の見直し

献血推進のための環境整備として以下の採血基準の見直しは考えられないか

→ ワーキンググループを設置し、個別の見直し案についてエビデンスの検証等を行い、安全に施行可能かどうか等を検討

- ① 400 mL 採血、成分採血の下限年齢の見直し
 - ・ 「18歳～」→ 「17歳～」又は「16歳～」と見直すべきか
- ② 血小板成分採血の上限年齢の見直し
 - ・ 「～54歳」を引き上げるべきか
- ③ 採血基準項目の「血液比重又は血色素量」を「血色素量」に改められないか
- ④ 年間総採血量、年間採血回数、採血間隔の見直しについて
 - ・ 400 mL の年間採血回数：「男性3回以内」→「男性4回以内」など
- ⑤ 男性の血色素量最低値を見直すべきか
 - ・ 現行の「12.5 g/dL」→「13.0 g/dL」など
- ⑥ 未成年者のインフォームドコンセント、ドナーの安全対策についてどう考えるか(海外との比較を念頭に)
- ⑦ その他見直しが必要な事項

3. その他

- ① 注射時の「痛み」を和らげる方策
 - ・ 針を細くすることは不可能か
 - ・ 薬剤などにより痛みを和らげる方法はないか
- ② 今後の課題

「採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」の設置について(案)

1 目的

「献血推進のあり方に関する検討会」(以下「検討会」という。)の審議事項である「採血基準見直しの検討」について、以下(1)～(4)に掲げた個別の見直し案等についてエビデンスの検証等を行い、安全に実施可能かどうかを検討する。

- (1) 400 mL 採血、成分採血の下限年齢の見直し
 - ・ 「18歳～」 → 「17歳～」又は「16歳～」と見直すべきか
- (2) 血小板成分採血の上限年齢の見直し
 - ・ 「～54歳」を引き上げるべきか
- (3) 採血基準項目の「血液比重又は血色素量」を「血色素量」に改められないか
- (4) 年間総採血量、年間採血回数、採血間隔を見直すべきか
 - ・ 400 mL の年間採血回数 : 「男性3回以内」→「男性4回以内」など
- (5) 男性の血色素量最低値を見直すべきか
 - ・ 現行の「12.5g/dL 以上」 → 「13.0g/dL 以上」など
- (6) 未成年者のインフォームドコンセント、ドナーの安全対策についてどう考えるか
(海外との比較を念頭に)
- (7) その他見直しが必要な事項

2 組織及びメンバーの構成(メンバー構成・案は別紙)

- (1) ワーキンググループは、7～8人程度のメンバーで構成する。
- (2) ワーキンググループに座長を置く。
- (3) 座長は、会務を総理し、会を代表する。
- (4) ワーキンググループは、必要に応じ、関係者から意見を聴取することができる。
- (5) 検討会の委員及び厚生労働省医薬食品局血液対策課は、オブザーバーとしてワーキンググループに出席することができる。

3 ワーキンググループの運営

- (1) ワーキンググループの運営は、検討会からの要請により、(財)血液製剤調査機構が行う。
- (2) ワーキンググループの運営に関し必要な事項は、(財)血液製剤調査機構が座長と協議の上定める。また、検討結果は、検討会に報告し、了承を得るものとする。
- (3) ワーキンググループは、原則非公開で開催するものとする。

SHA M SHA+ARE N D ARE

ライブ・イベントを核とした社会貢献活動事例集



2008年11月

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

コンサートを核とした社会貢献活動事例集

世界には様々な形の社会貢献の形がありますが、ここでは、ライブ・コンサート・イベントに特化した活動事例をご紹介します。

ライブ・イベントは、出演者とスタッフ、そして観客が一体となって作り上げるものです。そのマインドは、助けを必要としている方とそれを助けるスタッフ、そして献血をする方が一体となって実施する献血活動にも通じるものがあります。

音楽という、世代を

喜びも苦しみも共有し、



超えた共通言語を通じて

分かち合っていきます。

SHA + RE MIND

S = She...彼女も...

H = He...彼も...

A = All...全てで共有し、分かち合う

「楽しいこと。」「うれしいこと。」は、共有することでその喜びは2倍にも3倍にも広がります。

逆に悲しみや苦しみは、分かち合うことで安らぎ、明日への活力となります。

ライブ・イベントと、献血への啓蒙活動をリンクさせることで、皆が喜びも苦しみも共有し、分かち合えることと思い、事例集をご紹介します。

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

実施概要



あなたには何かできますか？
飲酒運転をなくするために

- タイトル: FM OSAKA STOP! DRUNK DRIVING PROJECT—SDD—
- 実施日程: 2007年10月15日～2008年3月末
- 主催社: FM OSAKA
- 名義関連: 後援: 内閣府、警察庁、法務省、国土交通省、大阪府、大阪市、大阪府警察、
(財)交通遺児育成基金、大阪市道路公社
特別協力: JFN(JAPAN FM NETWORK)、関西テレビ放送
- 協賛社: コア・パートナー: 阪急電鉄、阪神電気鉄道
サポート・パートナー: 第5回大阪モーターショー
パートナー: 朝日新聞社、アシスト、インターレックス、グルメ杵屋、
中央自動車工業、トヨタ自動車、日航ホテルズ、
NEXCO西日本、阪神高速地域交流センター、
八戸ノ里ドライビングスクール、ロート製薬
ヨドバシカメラ マルチメディア梅田、読売新聞大阪本社
- ターゲット: 若者を中心に、日本で生活する全ての方をターゲット。
- 実施目的: 飲酒マナーの向上、運転マナーの向上訴求により、飲酒運転防止・撲滅プロジェクトを推進する。

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

実施内容



- 放送展開: 啓蒙スポットCM、啓蒙番組、特別番組のオンエア。
啓蒙コメント付きの交通情報のオンエア。
- WEB展開: PC及び携帯にオリジナルサイトを制作。期間中掲示。メールマガジンの配信。
- 募金展開: イベント会場及び一般電話により、募金を呼びかけ。(合計2千万円以上を寄付)
- 印刷物展開: 啓蒙ポスターを制作し(計5タイプ)、梅田駅周辺を中心に掲示。
ステッカー、啓蒙リーフレットを制作し、街頭やイベント会場で配布。
タイムテーブル、新聞等で啓蒙告知。
- 署名展開: 賛同アーティストや、一般賛同者から署名を募り、イベント会場等で掲出。
(最終的に4千枚以上を回収)
- イベント展開: 賛同アーティストの出演による啓蒙イベントの実施。(計4回)
プロジェクトの集大成である、「LIVE SDD2008」の実施。(大阪城ホールにて)

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

ライブ・イベント詳細



- タイトル: LIVE SDD 2008
- 実施日程: 2008年2月20日(木) 17:30開場/18:30開演/22:00終演
- 実施会場: 大阪城ホール(大阪府中央区)
- 集客数: 約10,000名
- 実施内容:
 - ①趣旨に賛同するアーティスト(12組)の出演によるライブ・コンサート。
 - ②趣旨に賛同する来場者1万名による合唱。
 - ③長岡天満宮に奉納し、お祓いを受けた交通安全缶バッジの配布。
(出演者のメッセージ入り)
 - ④署名活動(SDD参加宣言カード)の記入促進・回収。
 - ⑤募金箱の設置による、募金活動。
 - ⑥ライブ・イベントの様相を収録し、FM OSAKA、JFN系フルネット番組、
関西テレビにてオンエア。
 - ⑦集まった参加料2000円×1万名 計2千万円を(財)交通遺児育成基金へ寄付。

ライブ・イベント出演者(全12組)

STARDUST REVUE、TRF、MAX、馬場俊英、Every Little Thing、小柳ゆき、BoA、mihimaru-GT、SunSet Swish、FUNKY MONKEY BABYS、WRECKING CREW ORCHESTRA、MORTAL COMBAT

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA



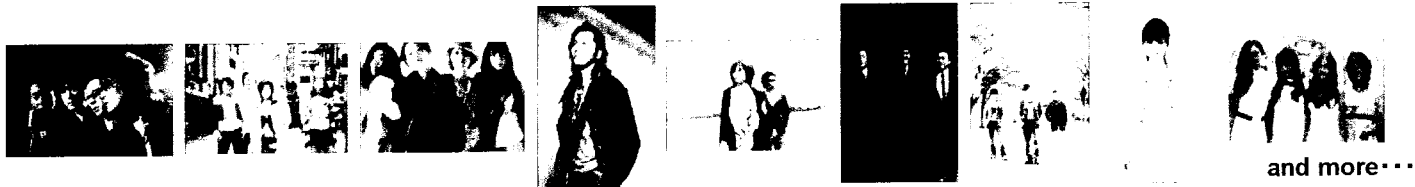
そして、2009年2月20日(金)第2弾ライブ、 LIVE SDD2009 開催決定!

実施日時: 2008年2月20日(金)
 実施場所: 大阪城ホール
 募集人員: 12月1日(月)より、抽選で合計1万名が参加。
 参加条件: 飲酒運転撲滅の趣旨に賛同し、
 ドネーション(参加料)2千円を募金。

集まった募金合計2千万は、今年度も全額、
 (財)交通遺児育成基金へ寄付します!

ライブ・イベント出演者

STARDUST REVUE、TRF、SPEED、石井竜也、mihimaru-GT、風味堂、SunSet Swish、奥村初音、BRIGHT



お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

実施概要JAF 45th PROJECT
KIDUNA

- タイトル: JAF presents KIDUNA ~Happy Drive~ 2008
- 実施日程: 2008年10月12日(日)~11月23日(日)
- 主催社: FM OSAKA
- 協賛社: 社団法人 日本自動車連盟
- 出演: 山本シュウ(プロジェクト・ナビゲーター) Skoop On Somebody (プロジェクト・リーダー)
大黒摩季/九州男/SEAMO/SOFFet/Full Of Harmony/夏川りみ/Leyona
- ターゲット: 20代・30代男女
- 実施目的: 「人の絆」を見失いがちな現代において、「Happy Drive」と「Good Music」のできる「心のレスキュー」を見つけよう、をコンセプトに番組とキャンペーン、ライブを実施。

実施内容

- 放送展開: JFN加盟全国民放FM38局 55分間フルネットSTART特番(10月12日)
JFN加盟全国民放FM38局 55分間フルネットFINISH特番(11月23日)
キャンペーン展開を告知するスポットCMや各地区独自展開を38局で実施。
- WEB展開: オリジナルWEBサイト(PC)を制作し、38局及び協賛社にリンクバナー掲示。
- 募金展開: ライブ会場やライブチケットの一部を(財)交通遺児育成基金に寄付。
- 印刷物展開: キャンペーン告知リーフレット(10万部)を各局と協賛社各支部等に設置・配布。
- イベント展開: 全国5地区キャラバン(賛同アーティストとともに各局を訪問)
キャンペーンの集大成として、大阪・なんばHatchでのリスナー招待及びJAF会員招待によるライブイベント「KIZUNA~Happy Drive~FINISH2008」を開催。

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

ライブイベント詳細

JAF 45th PROJECT
KIDUNA

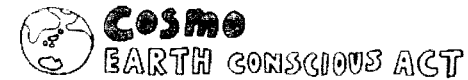
- タイトル: JAF presents KIDUNA ~Happy Drive~FINISH 2008
- 実施日程: 2008年11月17日(月) 開場18:00 開演19:00
- 実施会場: なんばHatch (キャパ1700名)
- 出演者: 山本シュウ(プロジェクト・ナビゲーター)
Skoop On Somebody (プロジェクト・リーダー/関西エリア代表)
大黒摩季(北海道エリア代表) / Full Of Harmony(東北エリア代表)
SOFFet(関東エリア代表) / SEAMO(東海エリア代表)
Levona(中・四国エリア代表) / 九州男(九州エリア代表)
夏川りみ(沖縄エリア代表)
- 実施内容: 趣旨に賛同するアーティスト(8組)の出演により、リレー形式でお送りするライブ・コンサート。
参加者には、チケット代のうち、1000円を募金として募り、交通遺児育成基金へ寄付。
さらには、当日の会場でも募金箱を設置。
ライブ・イベントの様子を収録し、11月23日(日)19時~19時55分に全国38局ネットでオンエア。



お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

実施概要



- タイトル: コスモ アースコンシャス アクト
- 実施日程: 2008年4月～2009年3月末(年間キャンペーン)
- 主催社: TOKYO FM 他、JFN加盟全国民放FM38局
- 協賛社: コスモ石油
- ターゲット: 20代・30代の環境意識の高い男女
- 実施目的: 「アースコンシャス～地球を愛し、感じるころ～」をテーマに、地球環境の保護と保全を全世界に呼びかけていく活動「コスモ アースコンシャス アクト」を展開。

実施内容

- 放送展開: レギュラーコーナー「コスモ アース コンシャス アクト ずっと地球で暮らそう。」(月～金/朝6:40)の全国ネット放送を中心に、スポットなどラジオでの告知展開。
- 清掃展開: 自然と親しみながら清掃活動等を行う、クリーン・キャンペーンイベント。(毎年全38地区+富士山で実施。)
- WEB展開: オリジナル・WEBサイトを開設し、活動告知や報告、さらにはアーティストからのメッセージ等を掲載。
- イベント展開: アースデー・ライブ・コンサートの実施及び、イベント模様の生中継。購入していただいたチケット料金の中から1ドルを、ワンガリ・マータイさんが進める植林活動「グリーンベルト運動」へ寄付。アフリカの大地に1本の樹を植樹。また、当日会場内でも募金活動を実施。(募金はトータルで720,043円) アルピニスト 野口健さんを迎えての講演会の実施。

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

ライブ・イベント詳細



- タイトル: コスモ アースコンシャス アクト アースデー・コンサート
- 実施日程: 2008年4月22日(火) 開演18:00 開場19:00 ※毎年世界アースデーに実施。
- 実施会場: 日本武道館
- 集客数: 約10,000名
- 出演: 絢香、BONNIE PINK、ダニエル・パウター
- 実施内容: 1990年から毎年4月22日のアースデーに日本武道館で開催しているイベント。
「アースコンシャス～地球を愛し、感じるころ～」の趣旨に賛同したアーティスト
たちがコラボレーションし、地球への愛を謳いあげ、来場者と共感します。
①趣旨に賛同するアーティストと、来場者によるライブ・コンサートの実施
②イベント模様の生中継(当日19:00～21:00)。JFN系全国38局ネット及び
世界27の国と地域、66の放送局で中継。
③購入していただいたチケット料金の中から1ドルを、ワンガリ・マータイさんが
進める 植林活動「グリーンベルト運動」へ寄付。
会場内でも募金活動を実施。(募金はトータルで720,043円)



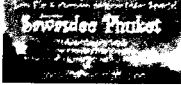
お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

実施概要

- タイトル: サワディ・プーケット・フェスタ イン バトンビーチ
- 実施日程: 2005年10月～11月末
- 主催社: FM OSAKA (協力:全国FMラジオ局約15社)
- 協賛社: タイ政府観光局、タイ航空
- ターゲット: ALLターゲット
- 実施目的: 2004に起きた、スマトラ島沖地震で甚大な被害を受けたタイ・プーケット島に日本からの観光客を再び誘致すること。

実施内容

- 放送展開: FM OSAKAのワイド番組を現地から生放送。
協力各局も、現地からの中継等を随時オンエア。
ツアー実施告知スポットCMをオンエア。
イベントの様相を収録し、後日特別番組としてオンエア。
- ツアー展開: 大手旅行代理店(HIS、JTB、近畿日本ツーリスト、日本旅行)及び、A&A(タイ専門の旅行社)との連携により、東京、大阪、名古屋、福岡発のツアーを実施。
合計3000名をプーケットへと誘致。
- WEB展開: ツアー情報、イベント情報、観光情報、番組のオンエア情報等を網羅した、オリジナルWEBサイト(PC)を制作し、関係各社とリンク。
- イベント展開: タイ政府観光局とFM OSAKAの合同主催により、二本とタイのアーティストが集まったライブイベント「サワディー・プーケット・フェスタ」を実施。

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

ライブ・イベント詳細



- タイトル: サウディ・プーケット・フェスタ イン バトンビーチ
- 実施日程: 2005年11月19日(土)
- 実施会場: タイ・プーケット島、バトンビーチ
- 集客数: 約20,000名
- 出演: 全国FMラジオ局DJ
我那覇美奈、川嶋あい、武田幸三、林明日香、MAX、光永亮太(国内アーティスト)
タイ国内アーティスト4組、計10組
- 実施内容: 趣旨に賛同したアーティストの出演による、ライブ・コンサート。
ライブの様子を収録し、後日特別番組としてオンエア。

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

実施内容

- タイトル: ハートエイド・四川
- 実施日程: 2008年7月14日(月)
- 主催社: ハートエイド／四川実行委員会
- 特別協賛: 日本航空
- 協賛: 藤田観光株式会社・株式会社ニチレイフーズ・トヨタ自動車株式会社・新日本石油株式会社他
- 後援: 読売新聞・産経新聞・中華人民共和国駐日本国大使館・日本赤十字社他
- 実施目的: 8万人以上の死者、行方不明者をだした四川大地震。いま、苦しんでいる四川の人々のために、その中で必死に生きている子どもたちの未来のために国境を越え賛同したアーティストが日本に集結。
- 実施内容: 「ハートエイド・四川」の舞台にたちメッセージを発信。
 - ①アーティストによるLIVEベントの実施。
 - ②チャリティーオークションの実施



ライブイベント詳細

- タイトル: ハートエイド・四川
- 実施日時: 2008年7月14日(月)開場18:00 開演19:00
- 実施会場: 東京国際フォーラム・ホールA
- 出演: ジュディ・オング、ジャッキー・チェン、南こうせつ、東儀秀樹、中孝介他
- 実施内容: 四川大地震の被災者へのチャリティーを目的としたライブ・イベント。



お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

実施概要

- タイトル: JET STREAM 40周年記念企画
- 実施日程: 2007年6月～11月末
- 主催社: TOKYO FM 他、JFN加盟全国民放FM38局
- 協賛社: 日本航空
- ターゲット: ALLターゲット
- 実施目的: 1967年から放送している長寿番組「JET STREAM」の40周年を記念して、リスナーへ感謝の気持ちを込めて展開。

実施内容

- 放送展開: 特別番組の放送。レギュラー番組を1時間拡大してオンエアする他、通常の番組(毎週月～金曜日 24:00～24:55)内でも、記念展開を実施。
- 機内展開: 期間限定で、番組をJALの機内でオンエア。
- WEB展開: 特設WEBサイト「夢旅」を制作。リスナーの夢の旅を募集し、最優秀夢旅賞1名様に、ペア世界一周旅行をプレゼント。
- イベント展開: 恵まれない子供たちと地球環境保護団体へのサポートを目的とした、チャリティー・コンサートを実施。合わせて、同コンサートを観覧するツアーも催行。収益の一部は寄付。

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

ライブイベント詳細

- タイトル: TOKYO FM JET STREAM 40th ANNIVERSARY
「国境なき合唱団」チャリティーコンサート2007 IN ウィーン
- 実施日程: 2007年11月26日(月) 20:00~22:00
- 実施会場: ウィーン楽友協会 大ホール(オーストリア)
- 集客数: 300名
- 出演: 鮫島有美子(第一部)、佐藤一昭(指揮・第一部)
ダニエル・ホーイェム・カヴァッツァ(指揮・第二部)、ウィーン室内管弦楽団(第二部)他
- 実施内容:
 - ①チャリティーを目的としたコンサート・イベント。
参加者とともに、ベートーヴェン交響曲第9番などを合唱。
 - ②コンサートへの参加を中心としたツアーの催行。(11月23日~28日)
 - ③参加費の一部と、募金により、寄付金(2,247,211円)を集め、児童福祉組織「ウィーンの森・SOS子どもの村(SOSキンダードルフ)」及び特定非営利活動法人「国境なき子どもたち」に寄贈。
 - ④ツアー及びコンサートの模様を収録した特別番組をオンエア。

お問い合わせ 本社営業部 06-4396-0852 東京支社 03-3222-0852

FM OSAKA

① 血液事業を支える人たち 企業や公共団体



街頭イベントでの献血会場

「献血してくれた人たちが、私たちの気持ちを伝えたい」と、小笠原さんとたつたある男の子のお母さんと日本赤十字社の駐日ルー・マッセルシーを話し、清血や事故の治療に役立つ血液を、村に届けていかなければ、日本の医療も少なくなる可能性がある。その言葉を聞き、涙がこぼれ落ちた。

ある男の子の闘病記
――ある男の子の闘病記――

「献血してくれた人たちが、私たちの気持ちを伝えたい」と、小笠原さんとたつたある男の子のお母さんと日本赤十字社の駐日ルー・マッセルシーを話し、清血や事故の治療に役立つ血液を、村に届けていかなければ、日本の医療も少なくなる可能性がある。その言葉を聞き、涙がこぼれ落ちた。

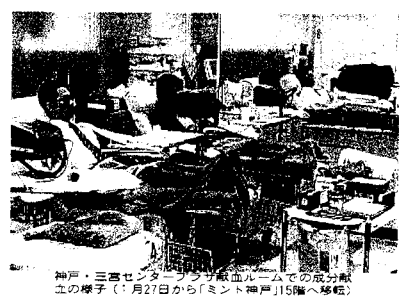
呼びかけに応え緊急の協力も

いのちをつないだ献血

「アンパンマンのエキス」



りょうすけくんと妹のなつちゃん



神戸・三宮セントラル病院の病室で治療中のりょうすけくん(2月27日から「ミンパ」15歳入会)

「献血してくれた人たちが、私たちの気持ちを伝えたい」と、小笠原さんとたつたある男の子のお母さんと日本赤十字社の駐日ルー・マッセルシーを話し、清血や事故の治療に役立つ血液を、村に届けていかなければ、日本の医療も少なくなる可能性がある。その言葉を聞き、涙がこぼれ落ちた。

過酷な治療を支えた輸血

「献血してくれた人たちが、私たちの気持ちを伝えたい」と、小笠原さんとたつたある男の子のお母さんと日本赤十字社の駐日ルー・マッセルシーを話し、清血や事故の治療に役立つ血液を、村に届けていかなければ、日本の医療も少なくなる可能性がある。その言葉を聞き、涙がこぼれ落ちた。

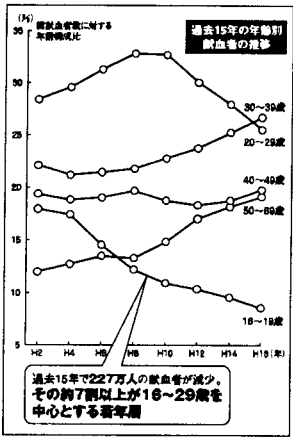
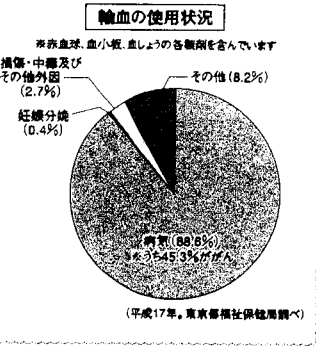
ありがたの気持ちがあふれ

「献血してくれた人たちが、私たちの気持ちを伝えたい」と、小笠原さんとたつたある男の子のお母さんと日本赤十字社の駐日ルー・マッセルシーを話し、清血や事故の治療に役立つ血液を、村に届けていかなければ、日本の医療も少なくなる可能性がある。その言葉を聞き、涙がこぼれ落ちた。

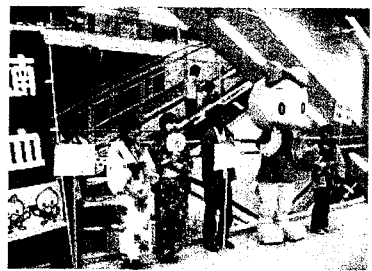
輸血を支えているのは 善意の献血です

がん治療にもっとも必要とされる輸血

交通事故など不慮の災害などの時に輸血は必要です。一般にそのイメージが強くなりますが、実際の血液の使われ方では意外にも事故は少なく、もっとも輸血が必要な場面はがんの治療です。病気のうち半分ががん治療で、りょうすけくんがたまたま神経細胞腫もその一つでした。



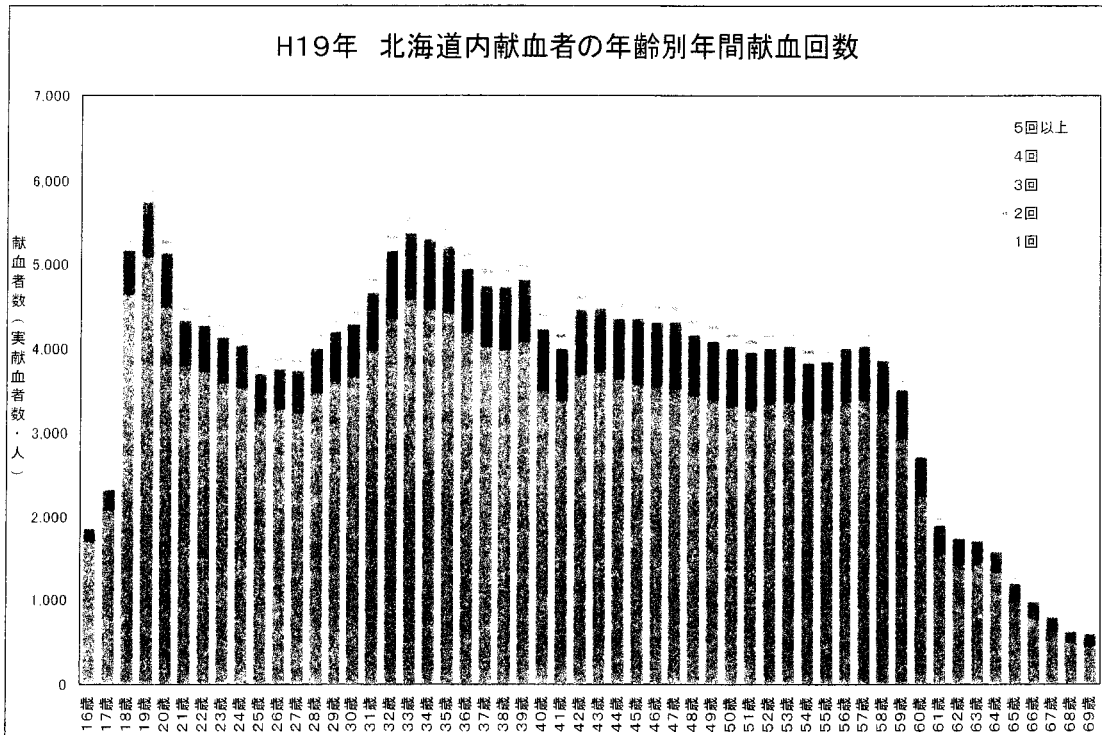
② 血液事業を支える人たち 献血募集呼びかける学生団体も



学生献血ボランティアが企画した献血の呼びかけ

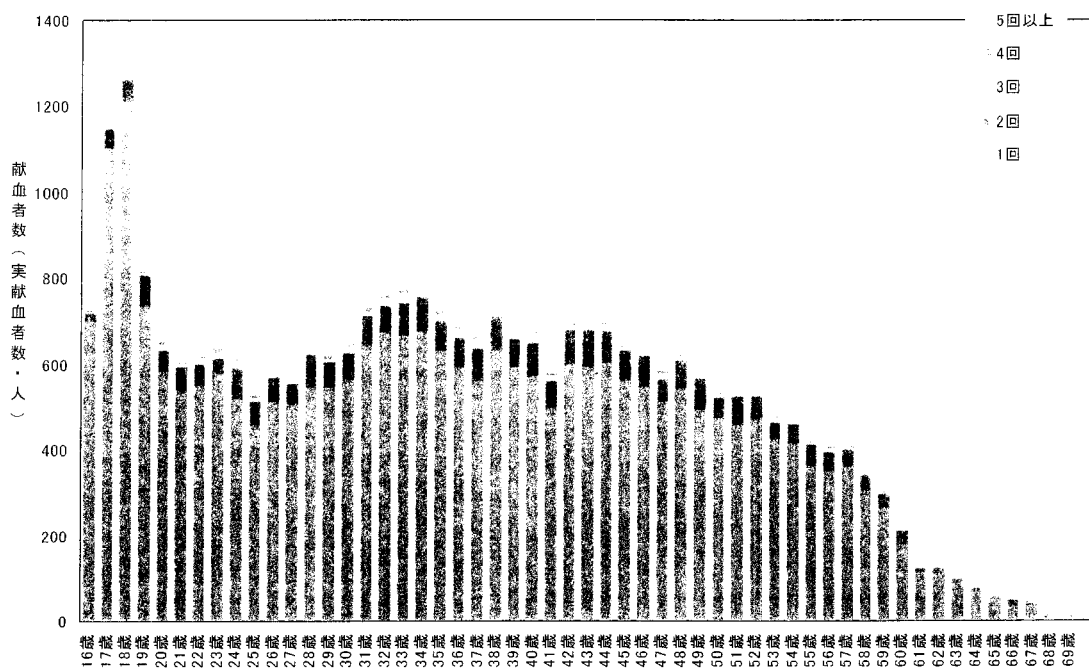
「献血してくれた人たちが、私たちの気持ちを伝えたい」と、小笠原さんとたつたある男の子のお母さんと日本赤十字社の駐日ルー・マッセルシーを話し、清血や事故の治療に役立つ血液を、村に届けていかなければ、日本の医療も少なくなる可能性がある。その言葉を聞き、涙がこぼれ落ちた。

年齢別献血者実数グラフ（年間献血回数別【6都道府県抜粋】）



- 実総献血者数
211,546人
- 年齢別に見る実献血者数
18～20歳と30歳代前半にピークがあるが、他の年齢層との差は比較的小さい。
40歳代以降の減少が比較的緩やか。
- 献血回数の傾向
献血者（1回）に対する献血者（2回）の割合は10～35%で、特に40歳以降の全年齢で19%以上となっている。他都府県と比較して全年齢を通じて高い傾向。

H19年 山形県内献血者の年齢別年間献血回数



- 実総献血者数

29,341人

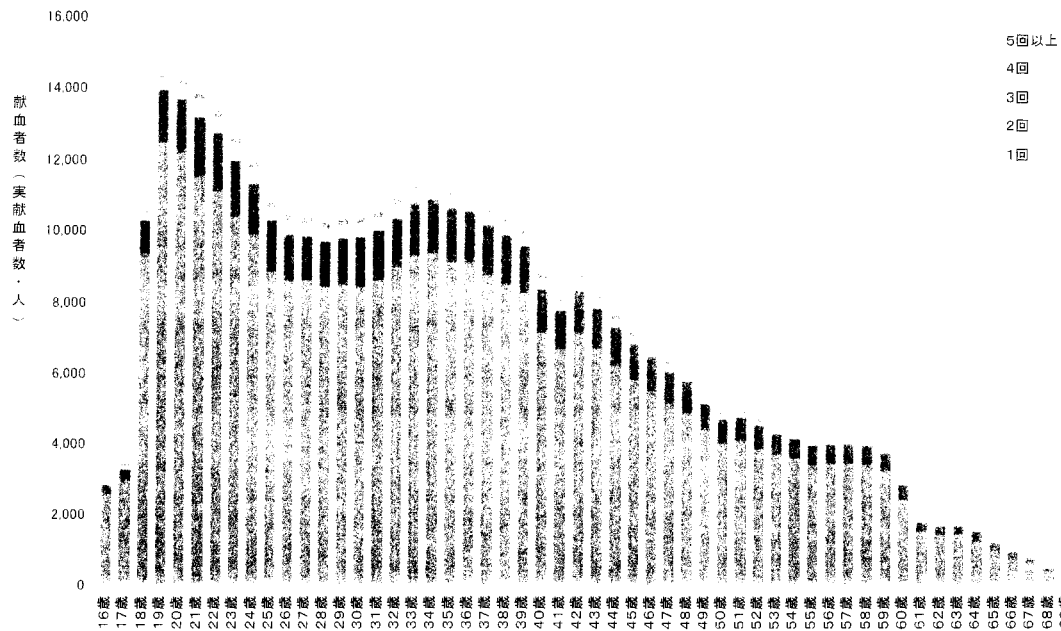
- 年齢別に見る実献血者数

17、18歳に顕著なピークがあり、その後大きく減少。30歳代前半に緩やかな第二のピークが見られる。

- 献血回数の傾向

献血者（1回）に対する献血者（2回）の割合は、全年齢を通じてほぼ10～15%だが、37歳及び40歳代で他の年齢よりやや高めの傾向（13～15%）。

H19年 東京都内献血者の年齢別年間献血回数



● 実総献血者数

396,666人

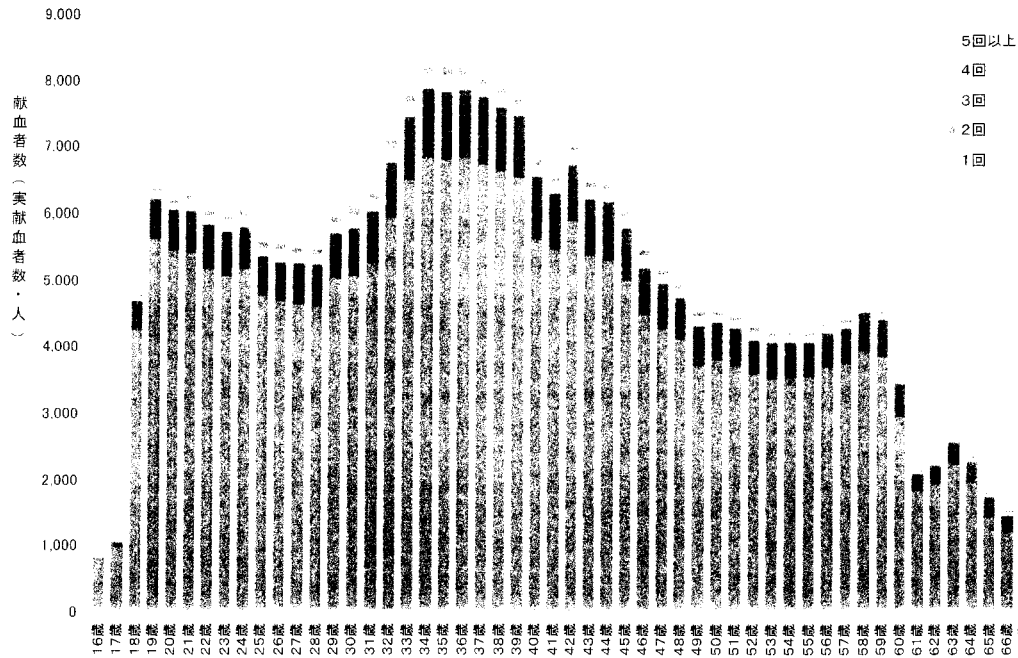
● 年齢別に見る実献血者数

19歳をピークに減少するが減り方は緩やか。30歳代前半に緩やかな第二のピークが見られる。若年層の献血者の絶対数が多い。

● 献血回数の傾向

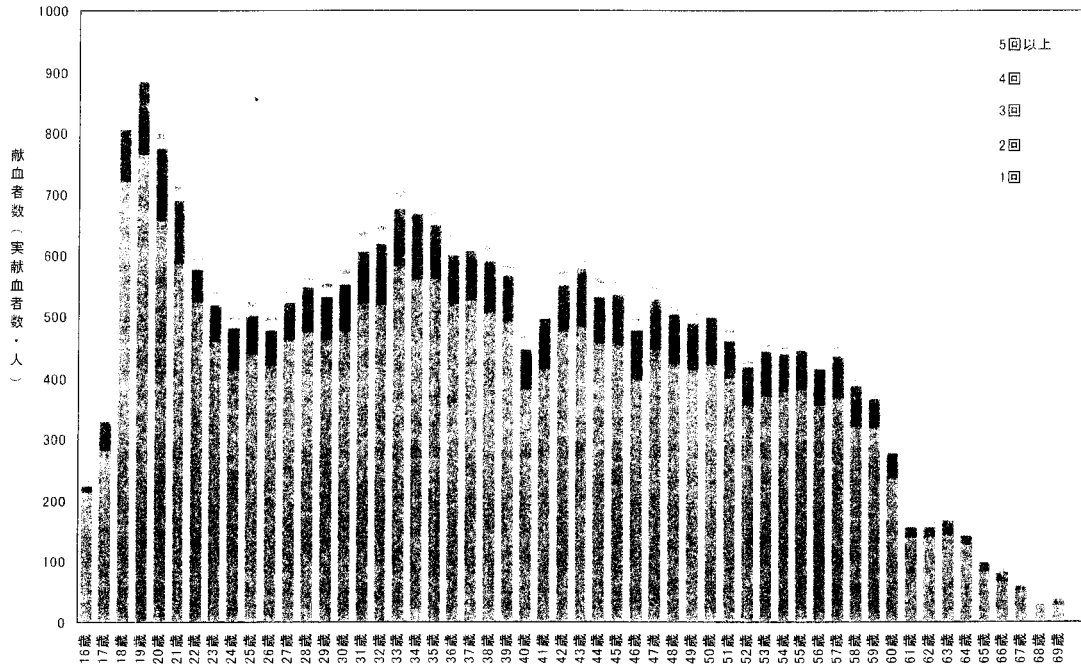
献血者（1回）に対する献血者（2回）の割合は、22歳以上のほぼ全年齢で15%以上。また、全年齢を通じて10%を割り込まない。

H19年 大阪府内献血者の年齢別年間献血回数



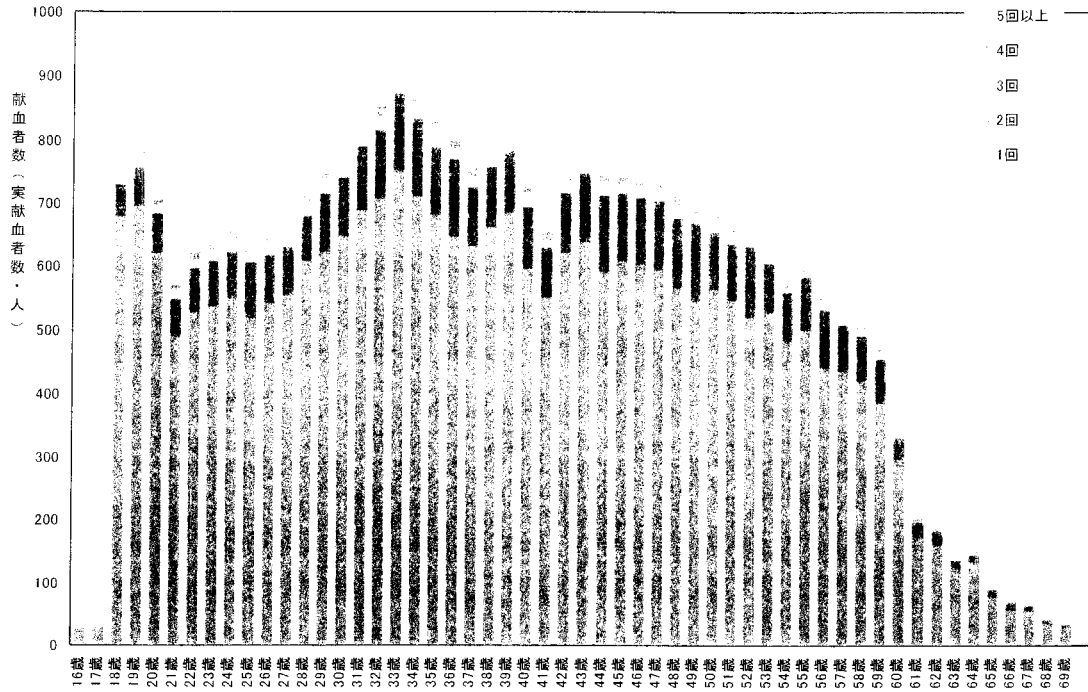
- 実総献血者数
275,361人
- 年齢別に見る実献血者数
18、19歳に他の都道府県のようなピークが見られず、33～39歳に顕著なピークがある。
- 献血回数の傾向
献血者(1回)に対する献血者(2回)の割合は、全年齢を通じてほぼ10～17%。

H19年 高知県内献血者の年齢別年間献血回数



- 実総献血者数
26,092人
- 年齢別に見る実献血者数
19歳にピークがあり、その後減少。30歳代前半に第二のピークがある。
- 献血回数の傾向
献血者(1回)に対する献血者(2回)の割合は、全年齢を通じてほぼ15~20%。

H19年 宮崎県内献血者の年齢別年間献血回数



● 実総献血者数

31,579人

● 年齢別に見る実献血者数

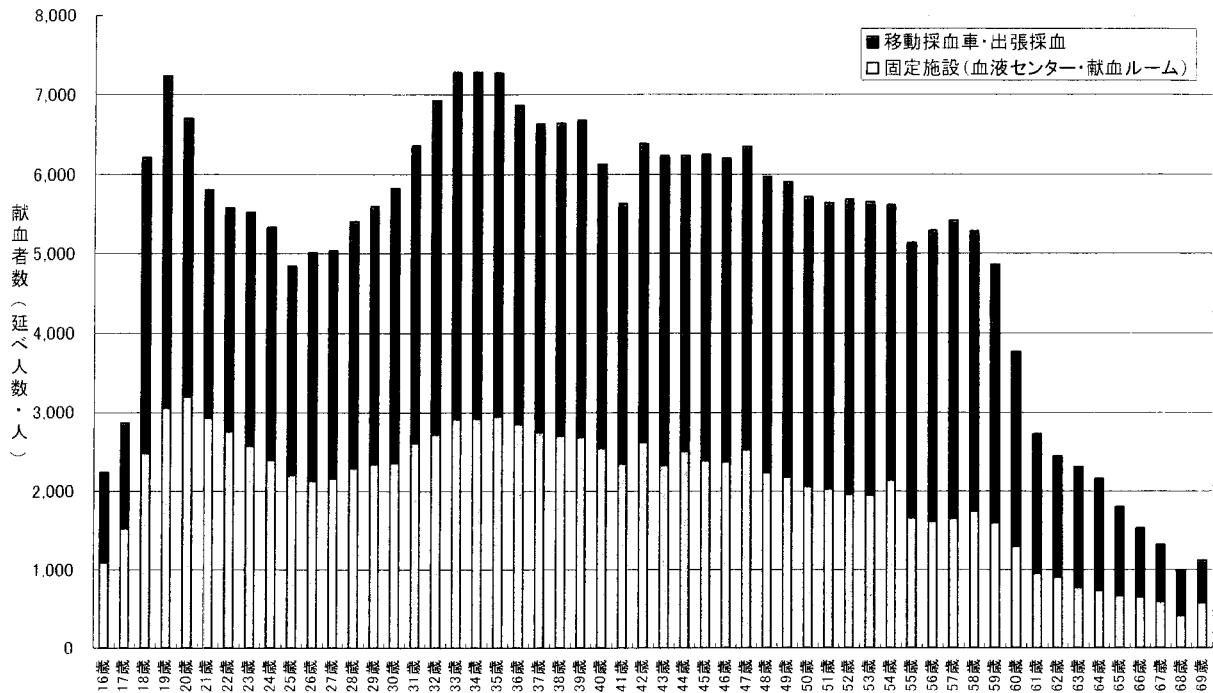
16、17歳が極端に少ない。18、19歳と30歳代前半にピークがあるが、他の年齢層との差は比較的小さい。

● 献血回数の傾向

献血者（1回）に対する献血者（2回）の割合は、20歳代でほぼ10～15%。30歳以上でほぼ15～20%。

年齢別・施設別延べ献血者数グラフ【6都道府県抜粋】

H19年 北海道内の施設別献血者数



● 延べ総献血者数 276,823人

移動採血車・出張採血 166,157人 (60.0%)

固定施設 (血液センター・献血ルーム) 110,644人 (40.0%)

● 年齢別に見る施設別献血者数

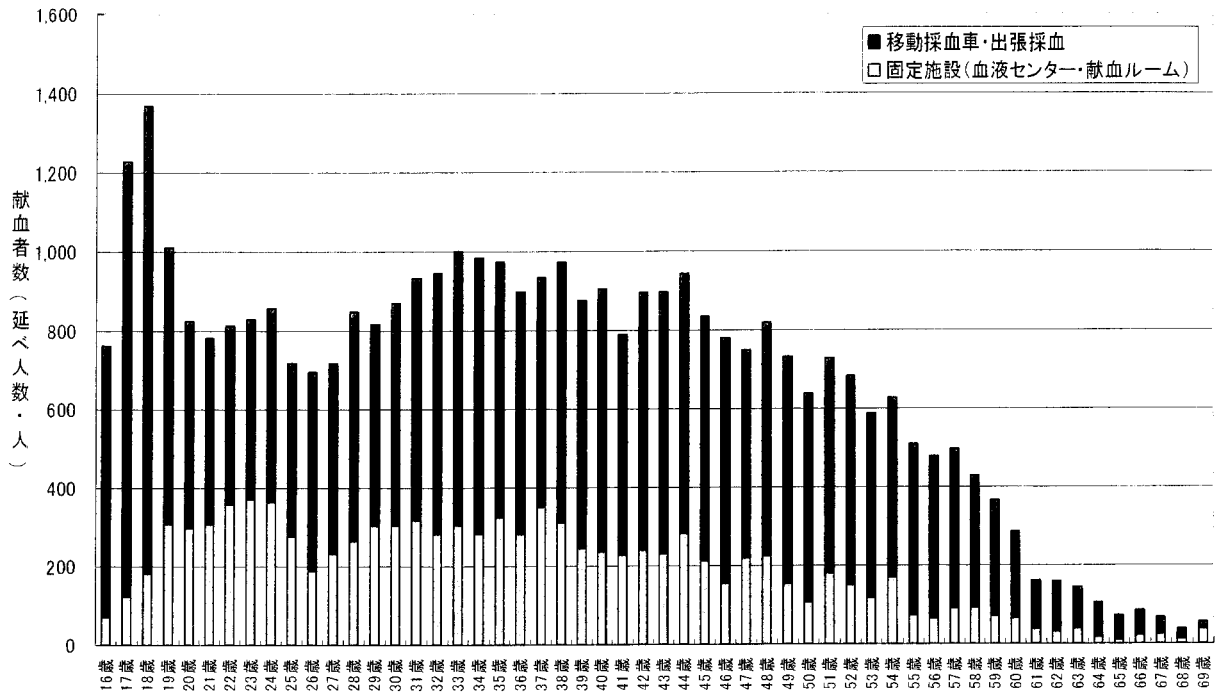
16～23歳は18、19歳を除き固定施設の割合がおおむね50%前後だが、18、19歳と20歳代後半～68歳は移動採血車・出張採血の割合が60～70%。

● 血液センター、献血ルーム数 (平成20年4月1日現在)

血液センター : 5カ所

献血ルーム : 6カ所

H19年 山形県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 36,705人

移動採血車・出張採血 26,395人（71.9%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）10,295人（28.1%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

20歳代前半を除き、移動採血車・出張採血の割合が65～90%。

中でも16～18歳と50歳代後半～60歳代前半に移動採血車・出張採血の割合の高い年齢層（80～90%）が見られる。

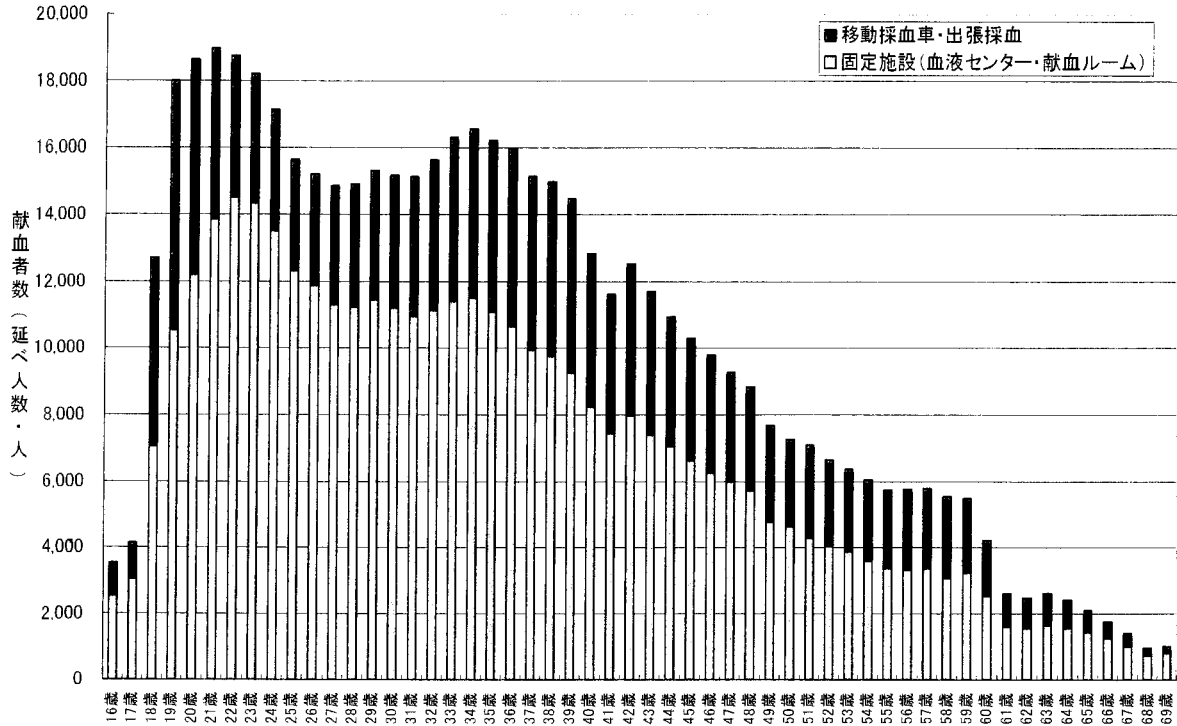
20～25歳は、他の年齢に比べて移動採血車・出張採血の割合が55～63%とやや低くなっている。

● 血液センター、献血ルーム数（平成20年4月1日現在）

血液センター：1カ所

献血ルーム：1カ所

H19年 東京都内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 550,525人

移動採血車・出張採血 175,198人 (31.8%)

固定施設 (血液センター・献血ルーム) 375,291人 (68.2%)

● 年齢別に見る施設別献血者数

全年齢を通して固定施設の割合が55%を超えており、特に16、17歳、20歳代前半～30歳代前半、60歳代後半は固定施設の割合が70%超と高い。

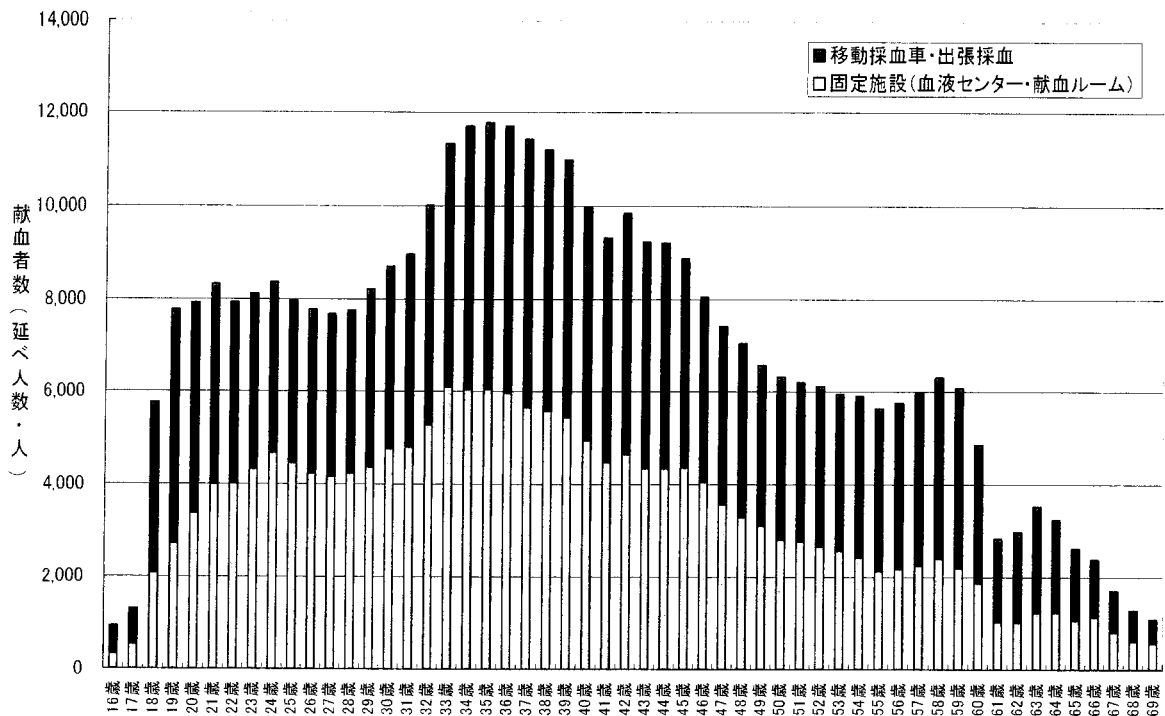
一方、18、19歳と50歳代後半は固定施設の割合が55～59%とやや低い。

● 血液センター、献血ルーム数 (平成20年4月1日現在)

血液センター : 2カ所

献血ルーム : 12カ所

H19年 大阪府内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 375,972人

移動採血車・出張採血 196,259人 (52.2%)

固定施設 (血液センター・献血ルーム) 179,688人 (47.8%)

● 年齢別に見る施設別献血者数

20歳代～30歳代前半と69歳は固定施設の割合が50～56%。

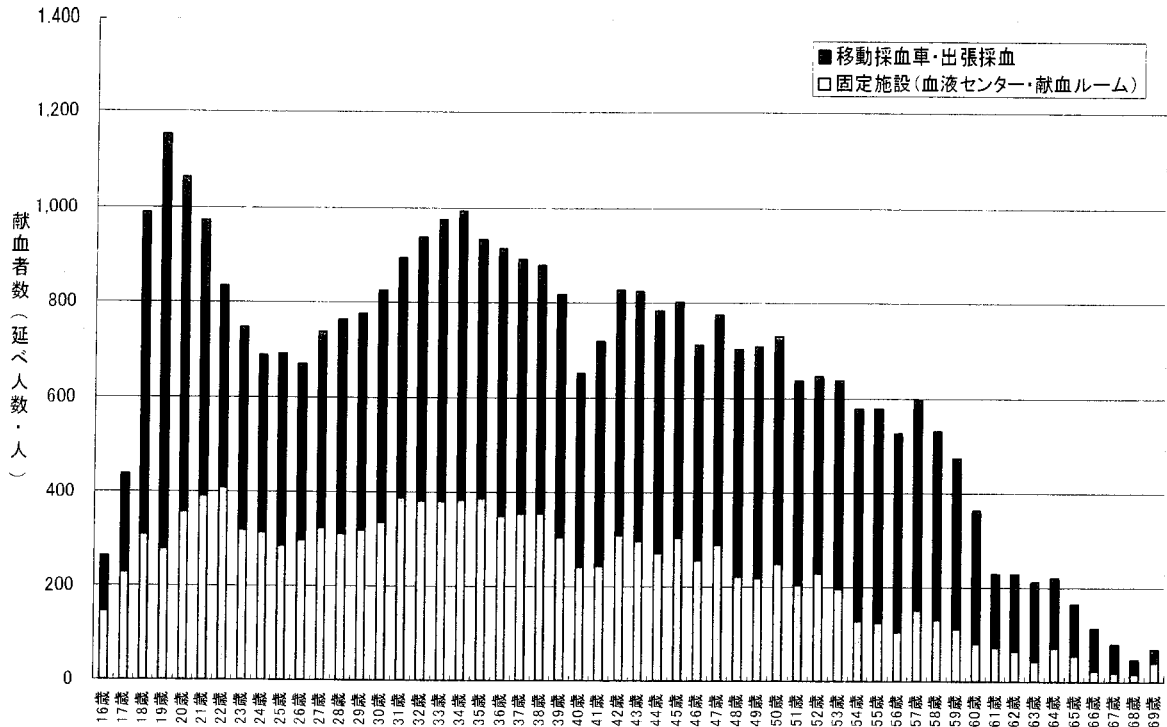
一方、16～19歳、50歳代後半～60歳代前半は、移動採血車・出張採血の割合が59～65%とやや高い。

● 血液センター、献血ルーム数 (平成20年4月1日現在)

血液センター : 3カ所

献血ルーム : 9カ所

H19年 高知県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 35,021人

移動採血車・出張採血 22,287人(63.7%)

固定施設(血液センター・献血ルーム) 12,715人(36.3%)

● 年齢別に見る施設別献血者数

16、17、69歳で固定施設の割合が52～60%であることを除き、移動採血車・出張採血の割合が高い(おおむね60～70%代後半)。

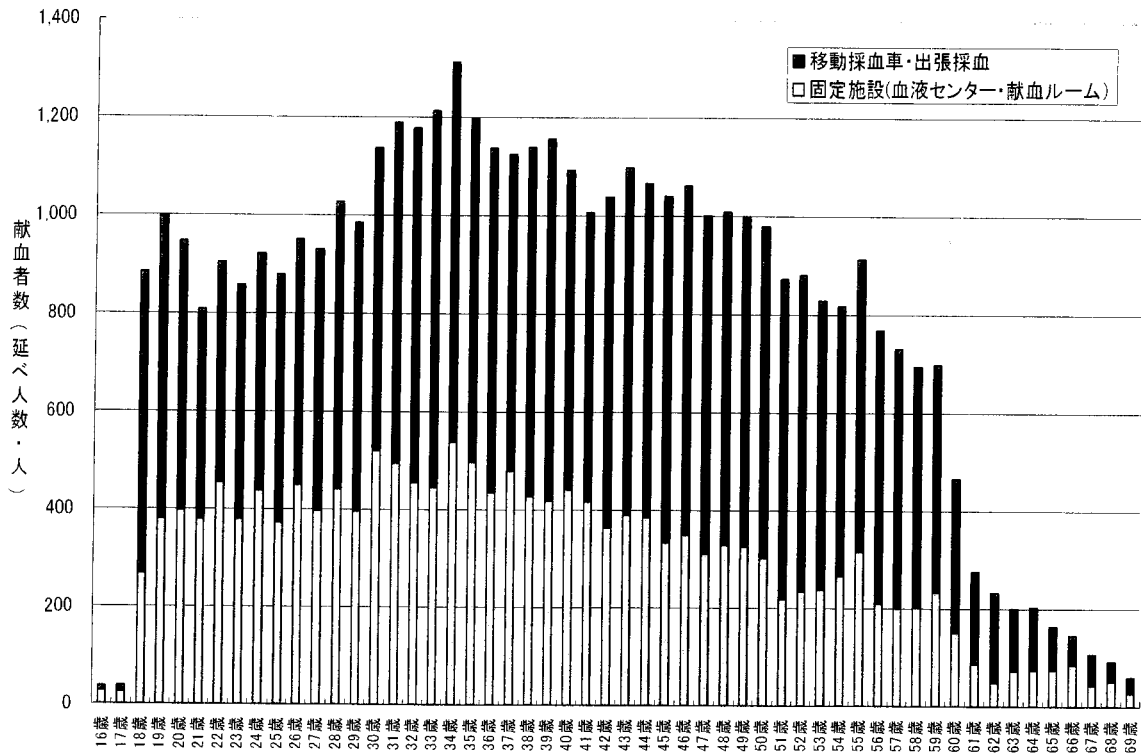
19歳と50歳代後半～60歳代後半にかけて、移動採血車・出張採血の割合が高い年齢層(74～79%)が見られる。

● 血液センター、献血ルーム数(平成20年4月1日現在)

血液センター : 1カ所

献血ルーム : 1カ所

H19年 宮崎県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 43,497人

移動採血車・出張採血 27,164人 (62.5%)

固定施設(血液センター・献血ルーム) 16,312人 (37.5%)

● 年齢別に見る施設別献血者数

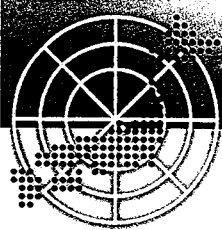
16歳、17歳で固定施設の割合が75.0%、67.6%と高いことを除き、特に50歳代から60歳代前半にかけて、移動採血車・出張採血の割合が高い年齢層（おおむね60～70年代後半）が見られる。

● 血液センター、献血ルーム数（平成20年4月1日現在）

血液センター：1カ所

献血ルーム：1カ所

初回献血者の増加を目指して（研究レポート）



国内特集

中部学院大学リハビリテーション学部
田久 浩志 先生

初回献血者の増加を目指して

1 はじめに

著者は福祉系の大学で教員をしている。普通の大学生にとって、骨髄移植はイメージできるが、輸血の重要性はなかなかイメージができない。単に痛い、自分は献血できる条件に合致していないだろうなどの思い込みで献血をする者が少ないのが現状である。そこで、どうすれば献血者が増加するかの研究を行ってきた。

先行研究¹⁾では、献血の意義を示す簡単な資料を提示した後の献血に対する意識変化と、実際に献血を行なった者の意識構造の解析を行った。そして、日本赤十字社のH18年度の統計資料より求めた新規献血者の割合と比較して、資料の提示により初回献血率が上昇する事を明らかにした。

本研究は先行研究を発展させて、未献血者が知らない実際の輸血現場のレポートを提示して満足度を増加させると、初回献血者が増えるかをネット上で追跡調査したものである。

2 対象と方法

血液センターにおけるアンケート調査では、来所した者の意見しか聞けない。そのため、献血の未経験者に意見を聞き、かつ献血をしたか否かの追跡調査は困難である。そこで我々は、ネット上の調査会社（ヤフーバリューインサイト社、東京）の協力で、全国の19-26歳の1505名の献血未経験者を対象にネット上で調査を行った。

対象者は年齢が19～26歳、献血未経験、献血に協力する気持ちは問わない、疾患服薬などが無く、献血に協力をしようと思えば可能である者を対象とした。回答者には今回の調査の趣旨を説明し、参加は本人の自由意志であり、参加したくない者は参加しなくてもよいこと、個人の特定ができる調査でないことなどの倫理的配慮を行ない、回答をもって同意を得られたと判断した。

調査項目は、献血への理解の程度、献血への協力の意思などを4段階の順序尺度で質問した。献血への不安を低減し満足度、あるいは納得する度合いを増加させるために提示する資料として1.献血の基礎的な資料、2.交通外傷での血液の利用例、3.新生児の交換輸血例の3資料を提示した後に輸血の必要性の認識、献血への協力などを4段階で質問した。そして3ヶ月後と7ヶ月後に実際の献血の有無を追跡調査した。

しかし、現状では輸血の現場をイメージできて、献血する気持ちにさせる資料は見当たらない。そこで、輸血・細胞治療医、外科医、内科医、麻酔科医の方々から、「輸血現場のまったなしの実情」を集めて、その資料を提示すると未経験者が献血の重要性を理解する効果的な資料になるのではないかと考え、その資料の初回献血者増加の効果を検討することにした。

実際の輸血現場での医師の経験談を収集する時の条件として

1. 輸血に実際に関係する医師の体験談を集める。
2. フィクションではなく実体験を原則とする。
3. 恒常的に献血者を確保するために、災害現場など特殊な場面は除外する。
4. 内容を一般の人でもわかるように補足する。
5. 内容は事前に大学生に見せて理解できるかを確認する。

などに配慮した。今回は外科と新生児集中治療室の2種類の手記を用いた。外科の手記の例を資料1に示す。

なお、初回献血参加者を検討するための基礎資料として、H18年度国勢調査資料²⁾と日本赤十字社のH18年度初回献血者資料³⁾とより年齢別の人口あたりの初回献血者率を別途求め、対象とした1505名では3ヶ月後では5名、7ヶ月後では9名が初回献血をすると推定した。

資料1 外科での手記

外科医となってもう何年になるだろう。

手術室に入ると、今でもふとあの時の記憶がよみがえる。

「先生、患者さんの容態が急変しました。」

「わかった、今行きます。」

救急外来をやっていた私は、ナースの甲高い声に促されて吸い込まれるように手術室にはいった。

ささほど救急車で来たバイクに乗っていて交通事故にあった患者さんの緊急開腹手術をやりはじめているはずだ。

いつもは静寂なはずの手術室がその時ばかりはハチの巣をつついたような騒ぎになっていた。

部屋に入るとまずモニターの画面が目飛び込む。動脈圧は60をきっている。そのまま血圧が低下したら患者さんは死亡してしまうため、血圧を維持するため麻酔医は必死の形相で出血を補う輸液をバンピングしている。

まずい、と心の中で叫ぶ。

「おい、どうしたんだ。」すでに青ざめた表情の後輩の術者に声をかける。

「すいません、肝破裂です。肝門部の血管を遮断して裂けた所を圧迫止血しても一向に出血が止まりません。」

彼の声がかすれている。

すでに術野のコンプレッセン（手術で患者さんにかぶせる布）は真っ赤な血で染まり、ベット脇の床にはたれた血液で血貯まりができています。

（以下省略）

3 結果

基礎的資料提示の前後、最初と2番目の臨床資料提示後の各々で、今後の献血への協力意向の平均点つまり満足度は2.59、2.75、2.79、2.81と上昇した。調査開始時の今後の献血への協力意向と献血の有無の関係を表1に示す。3ヶ月後で41名、7ヶ月後には18名が献血し合計59名が初回献血を行なった。表1をみると最初に肯定的な協力意思の者が実献血になることがわかる。

資料提示の効果をみるために、確率の比であるオッズ比 (O.R.) を求めた。日赤統計からの理論予測値と実献血の比較は3ヶ月後でO.R.= 8.44 (C.I. 3.32-21.43) だった。一方、H18年度に今後の献血協力意思が肯定的な者に痛みなどの基礎情報を提示して同様の調査をした場合の3ヶ月後の献血者数は23人となりO.R.= 1.70 (C.I. 1.01-2.84) となった。未回答者を除外すると、最終的に7ヶ月で59名が初回献血し906名が未献血であった。この値と日赤統計を比較するとO.R.= 6.92 (C.I. 3.41-14.03)、基礎情報の提示と比較するとO.R.= 1.38 (C.I. 0.93-2.01) となった。

表1 資料提示前の献血協力意向と実際の献血の有無

献血の有無	調査開始時の今後の献血協力意向				計
	ない	どちらかというもない	どちらかというもある	ある	
3ヶ月後 献血	2	6	22	11	41
3ヶ月後 打ち切り	15	74	117	29	235
7ヶ月後 献血	0	4	11	3	18
7ヶ月後 打ち切り	26	103	152	24	305
7ヶ月後 未献血	95	296	421	94	906
計	138	483	723	161	1505

表2 3ヶ月、7ヶ月後の初回献血者のオッズ比

調査時	種類	献血者/未献血者	組み合わせ	O.R.	95% C.I.
3ヶ月後	a. 輸血場面提示-1	41/1229	a-b	8.44	3.32~21.43
	b. 日赤統計	5/1265			
	c. 輸血場面提示-2	33/705	c-d	1.70	1.01~2.84
	d. 先行研究	23/1169			
7ヶ月後	e. 輸血場面提示-1	59/906	e-f	6.92	3.41~14.03
	f. 日赤統計	9/956			
	g. 輸血場面提示-2	47/515	g-h	1.38	0.93~2.01
	h. 先行研究	74/1118			

輸血場面提示-1: 臨床現場での輸血をする状況を提示 (今回、今後の献血の協力意思 否定+肯定)

日赤統計: H18年度日赤の統計による初回献血者の率を使用

輸血場面提示-2: 臨床現場での輸血をする状況を提示 (今後の献血の協力意思 肯定的のみ対象)

先行研究: H17研究で献血の基礎的情報や痛みの程度を提示 (今後の献血の協力意思 肯定的のみ対象)

4 考察とまとめ

あまり知られない臨床での輸血状況を提示した場合と日赤統計を比較すると、初回献血のオッズ比は3ヶ月後で8.44、7ヶ月後で6.92と増加した。一方、献血に対して肯定的な意思の者に限った場合、臨床現場での輸血状況の提示と基礎的な情報提示の場合のオッズ比は3ヶ月後で1.70と有意な上昇であったが、7ヶ月後で1.38となり有意ではなかった。この解釈は、7ヶ月経過すると最初の基礎的な情報提示の効果は薄れるとも考えられる。

一方、資料の提示につれて今後の献血協力意向の満足度の平均点が増加することから、資料提示は協力意思のある人の満足度、つまり一種の協力の度合いを増加し、実献血する考えを持つ人の肩を後ろから押す効果があると考えた。

2008年度は、すでに献血をした者に資料の情報提示をして満足度を増加させた時の、複数回献血者の増加の有無などのマーケティング効果の検討を行っている。今後、著者の行なう、献血者募集の活動の報告や実証検証の参加施設募集のお知らせなどは、本務先大学のWEBで公開する予定なので参考にされたい4)。

なお、本研究の一部はH19年度厚生労働科学研究補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 (H19-医薬-一般-033)「献血者の増加に資する教育教材の開発とその効果の検証」の研究によった。また、本研究の一部は第32回血液事業学会(大阪)で報告した。

執筆者連絡先：〒501-3993 関市桐ヶ丘2-1 中部学院大学リハビリテーション学部 田久浩志

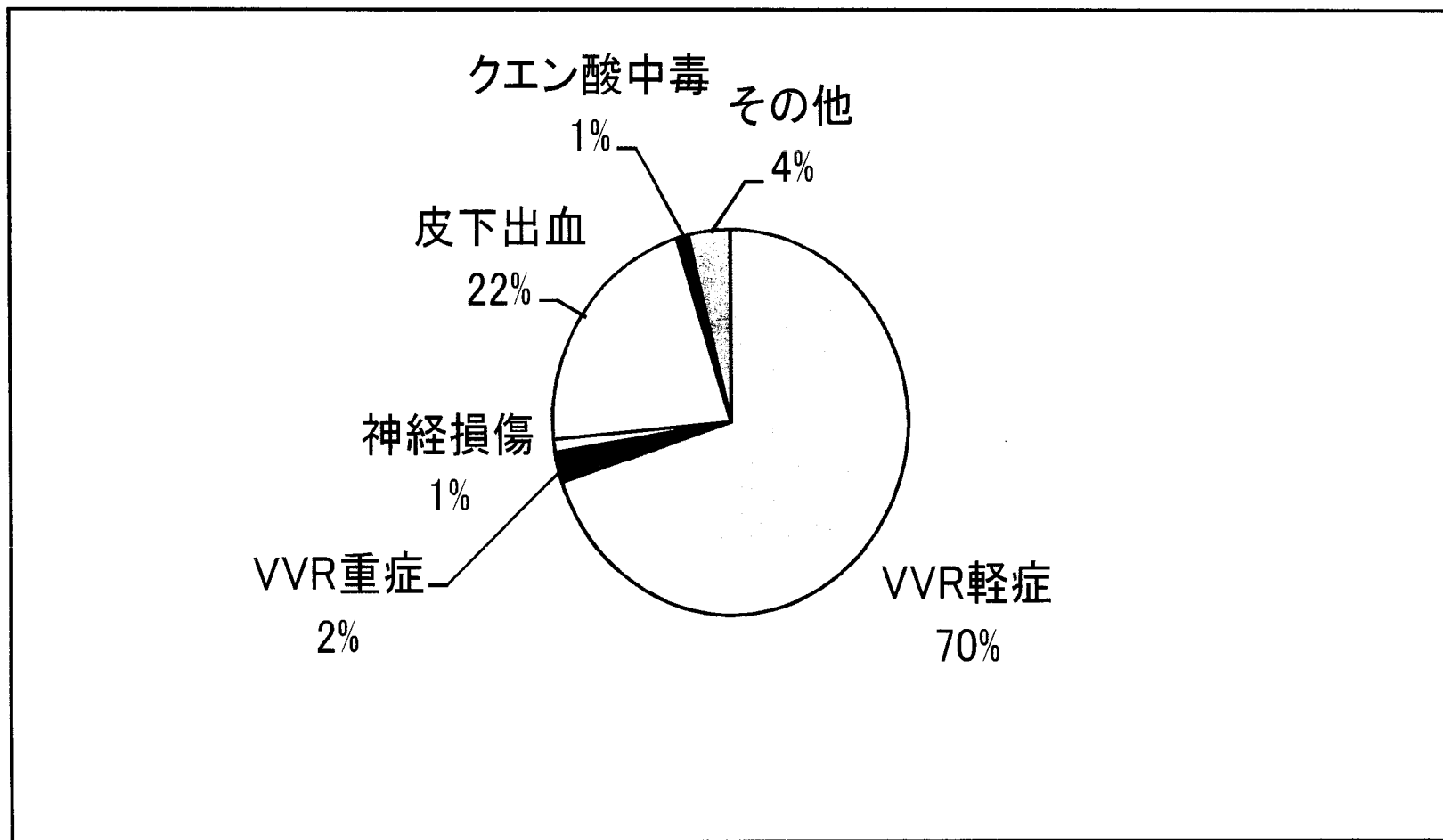
takyu@chubu-gu.ac.jp

参考文献

- [1] 献血者の増加に資する教育教材の開発とその効果の検証 (H19-医薬-一般-033) 総括研究報告書、平成19-20年度厚生労働省科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 研究代表者 田久浩志
- [2] 総務省の住民基本台帳に基づく人口・人口動態及び世帯数(平成18年3月31日現在)
http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/xls/020918_sasi3.xls 2008/4/1 アクセス
- [3] 日本赤十字社血液事業年度報 平成18年度統計表(PDF版)
<http://www.jrc.or.jp/active/blood/pdf/18nendohou.pdf> p10 年代別男女別初回献血者数初回献血率
2008/9/16アクセス
- [4] 中部学院大学 田久研究室 WEB研究室 研究費関連の報告書
http://web2.chubu-gu.ac.jp/blog/web_lab0/takyu/research/post-11.html 2008/9/16 アクセス

この原稿は、若年層の献血意識調査や初回献血者の献血推進等に関するご研究に取り組んでおられる、中部学院大学リハビリテーション学部 田久浩志先生に執筆していただきました。

副作用の割合



全献血者の副作用の頻度

	VVR軽症	VVR重症	神経損傷	皮下出血	クエン酸中毒	その他	合計
%	0.73	0.026	0.011	0.23	0.011	0.039	1.04

平成14年日赤データ